



「1回は行ってみたかったなー、ライブ」

「せめて俺たちが大学生になるまで待っててくれればよかったのになあ」

身の程知らずの男が嘆く。だが気持ちは同じだった。もちろん今までのライブは全部DVDで何度も見返したし、そのたびに感動した。しかし、やっぱり生の会場の雰囲気、彼女たちの歌声、笑顔などが創り出す、全身が痺れるほどの迫力は液晶では伝わりきらないのである。もう今ではライブに行きたいという欲望がぼくの頭の中をパンパンに満たしている。

ああ、東京生まれだったらなあ、親が優しくなかったらなあ、受験生じゃなかったらなあ、と自分の生まれ落ちた時代と環境を改めて悔やんだ。

できることなら全ての束縛から逃れて空に飛び立ちたい。電線の上でチュンチュンとリズムよく鳴くスズメを見て思わず、鳥になりたい、とつぶやいた。その真意を汲んでくれたのか、サトウも軽くうなずいた。

次の瞬間、ガシャアアアアアンとオタク話など吹っ飛ばすような衝撃音が響き、スズメたちが一斉に飛び立った。轟音のした方向にぼくらが振り向くと、そこにはトラックがあった。正確には、歩道に乗り上げ電柱にぶつかって止まったトラックである。

歪んだドアの隙間から運転手らしき男が必死に出てきているのが見える。あまりに突然の出来事にぼくらは完全に固まってしまったが、どうやら人がはいないことに気づくと少

しずつ頭が回り始めた。すると突然、

「あつ俺のタオル！」

とサトウが叫んだ。見ると、彼のタオルが衝突したトラックのタイヤの下敷きになっていた。サトウがいつも首にかけて大事にしているアイドルのグッズタオルだ。

「やっべ、落としてたの気づかなかったわ。ちよっと取ってくるから待ってて」

「いやさすがに危ないだろ、見ろよあれ」

トラックの荷台には何本もの太い丸太が山のように積まれており事故で車体が傾いたためか、今にも転がり落ちそうな状態である。

「ま、大丈夫だろ。あのタオルは命より大切だからな。タイヤの下敷きなんかにさせてられるかい！」

「お前なあ……。じゃあぼくもついていくから。早いとこ取ってこよう」

「サンキュー。さすが俺の親友だぜ」

サトウの危機感のなさにため息をつきながらも、説得するのが面倒くさいという気持ちのほうに勝ってしまった。サトウはタイヤを懸命に押してタオルの救出を試みるが、腰の高さほどもであるタイヤはびくともしない。

「おい、お前図体はでかいくせに、全然力ねえなあ」

「うるせえ！ 早くお前も手伝えよっ！」

仕方なくぼくもタイヤを押したが、予想以上に重い。2人で顔を真っ赤にしてこれでもかというほど押すと、ようやく

ごろりと動き、見事タオルの救出に成功した。達成感からサトウとハイタッチを交わした瞬間、後方で、ぎちっ、と何かがきしむ音がした。

咄嗟に振り向くと、荷台の丸太を結ぶロープが限界を迎えており、ぼくは最悪の事態が起こることを悟った。ぼくが隣にいるサトウにおいつ、と叫んだのとロープが限界を超え弾け飛んだのは同じタイミングだった。

そこからはもう断片的な映像しか記憶に残っていない。

自分の何倍もの大きさの丸太たちが転げ落ちる。

サトウの固まった表情。

動かない体。

迫りくる丸太を見ながら最後に頭に浮かんだのは、ライブ行きたかったなあ、だった。

次の瞬間、今度は文字通り目の前が真っ暗になった。

なんだろう、ここは。すごく動きづらい。全身を何か硬いもので覆われている気がする。おっ、背中の辺りは頑張ったら破れそうだ。ふんっ、よしっ、もうちよつと！ よいしょよ おおおお！

硬いものを破ると、そこは外で、空の色から察するに早朝らしかった。ぼくはまず自分がもう人間ではないことを悟った。なぜなら今ぼくは木の幹にしがみついているからだ。ぼくが知る限り人間は早朝から木にはしがみつかない。あの事故で死んで何かに生まれ変わったのだろうか。そういえば暗

闇の中で血の臭いや病院のアルコールの臭いがしていた気もする。

サトウはどうなったのだろうか。まあ、ぼくが死んでしまったことに悔いはない。別に将来に希望があるわけでもなかったからちよつどよかったのかもしれない。心残りがないこともないが……。

しかし、どうやらこの心残りも解消できそうだ。体の後ろで何かがバタつく感覚がある。まだぎこちないが、この前後にあおぐように動く感覚は、おそらく翼だろう。そうだ、ぼくは鳥に生まれ変わったんだ！ 喜びに全身が打ち震える。願い事がかなった。神の存在など信じていなかったが、これはさすがに認めざるをえない。

そうとなつたらやることは一つ。東京まで飛んで行こう。そしてライブを観よう。多分、ライブ会場のスタジアムは開放型だったはずだから鳥ぐらいなら入れるだろう。特等席で見てやろうじゃないか。

昂るたかぶ気持ちをよそに、まず確認すべきことがあることを思い出した。今日の日付だ。精一杯目を動かして辺りを見渡す。どうやらこの木は街路樹のようで、目の前にはショーウインドウがあり、その中にテレビが設置されていた。

そこには全く見覚えのない朝の情報番組がながれており、画面の左上には「8月3日」と表示されていた。ということは今日は水曜日。よし、どうやらぼくが事故に遭った日から3日ほどしかたっていない。ライブがある日は来週の木曜日。

ちょうど一週間の猶予がある。鳥の飛ぶ速度ならおそらく余裕だろう。

ふと見上げると朝日が昇りはじめ、空がさらに明るくなってきていた。薄紫色のイワシ雲が淡い橙色に染まってゆく。まるでぼくのこれからの明るい未来を暗示しているかのようだ。

さっそく飛び立とうと思ったが、何か違和感があった。さつきからうっすらと感じていた違和感だ。何だろう、何かが引っかかる。意識が戻ってからのことを一つずつ整理してやっとその正体が分かった。

しがみつく、だ。ぼくは今確かに木の幹にしがみついている感覚があるが、鳥がそんなことをするだろうか。この不可解な状況を説明できるある可能性に辿りついたとき、全身に悪寒が走った。

いや、まさか、そんなはずは。

動揺したぼくが思わず翼を激しくバタつかせると、体がフワッと浮く感覚があり、手足が樹皮から離れた。ぎこちないながらもなんとか空中に浮くことができたぼくは、シヨールウインドウに映る自分の姿を見て、ああやっぱり、と声を漏らした。しかし実際に漏れたのは、夏の風物詩であるあの不協和音だった。

ガラスに映る翼、いや翅。うっすらと黒光りする体。そして木にしがみつく無機質な茶色い抜け殻。いやでも確信させられる。鳥なんてもんじやない、あろうことか、僕はセミに

なっていた。何で、どうしてセミなのか。これじゃあ人間だったころのほうがまだましだった。神なんて輩に一発喰らわしてやりたい。自分を落ち着かせるためにもひとまず木にとまる。

ぼくはセミに生まれ変わった。でも、アイドルのライブには行きたい。ライブまでは一週間。セミの寿命も、一週間。……とんでもなくハードなレースに参加させられた気がした。ふと見上げると、空高く浮かぶ橙色のイワシ雲がぼくの行く末を嘲るように見下ろしていた。

日曜日。セミになってから4日が経っていた。今は週末にしては人通りの少ない、どこかの街の喧騒の中を飛んでいた。ギラギラと刺すように照りつける真夏の紫外線にどいつもこいつももうんざりした表情を浮かべている。ぼくもこの眩しさと暑さが嫌いだった。でも今では気持ちいいときえ感じている。こういうところで人間の頃とは変わってしまったのだと感じる。

数日間セミとして夜通し南へと飛んでいる中で、ぼくはこの姿に慣れてきつつあった。昔からいつも冷静だな、とは言われていたが、まさかここまでとは。自分で自分に驚きつつ、いや、と訂正する。

冷静なんてカッコいいもんじやない。冷めているんだ。というか興味がないのだ、周りに、自分に。だからこんなありえない現実を受け入れてしまうのだ。自分の中身のなさに呆

れた。また自分を嫌いになった。こういう考え方はセミになってもネガティブなままだしい。

横に目をやると、どす黒い雲が青を塗りつぶしだしていた。どうやら一雨降るようだ。ぼくは翅に力を入れた。

火曜日。2度目の前言撤回。こんなもん慣れてたまるか。雨に濡れれば体は重くなるし、休めば鳥共に喰われかける。間一髪逃げ切ったが、自分と同じ姿をした者が捕食されているのを見るたび恐怖が沸き上がった。

鉛色の雲に覆われた街では、たたきつけるような風が吹きすさぶ。何で僕がこんな目に。いやだ。しんどすぎる。ライブまであと2日。間に合うか。さっき見たこの地名からして微妙なラインだ。思わずハア、とため息をついた。ぶぶ、と羽音がしただけだった。

スタジアムのシルエットが見えたとき、歓喜の音色が自分の体から出るのを感じた。長かった。ここまで。セミに生まれ変わってから今日でちょうど一週間。昨日から体は動きづらくなっていた。

スタジアムの周りには多くの人々が集まっていた。どうにか間に合ったようだ。小さい心臓が高鳴った。やっと見られる、生で。何に対しても興味のなかったぼくが唯一熱中できたもの。長年夢見た景色がすぐそこにあった。

近づくにつれて違和感が胸の中に広がった。今回はすぐに

その正体が分かった。ファンだ。会場に集まるファンの大半が中年の女性、いわゆるおばさま方だった。みんな頬を赤く染め少女のように騒いでいる。悪い予感がする。ぼくはスタジアムの正面に掲げられた横断幕を見た。

体が硬直した。信じられなかった。そこには知らないソロ歌手のデビュー5周年コンサートが謳われていた。隣には和服を着た美形の男性のパネル。演歌歌手だろうか。そんなことはどうでもいい。

なぜだ、どういうことだ、日付を間違えたか。明日か、昨日だったか。それとも……。狼狽えるぼくの複眼に横断幕の右下に小さく記された一行が入った。

「1120271」

それは僕が生きていたときとはまるで違う数字だった。全身が弛緩していくのを感じた。頭に妹の声が響く。

「お兄ちゃん、知ってる？ セミってねえ、外では一週間しか生きられないんだけど、その前に土の中で7年過ごすんだって」

思い当たる点はいくつかあった。それらをすべてつなげたとき、ぼくは失笑した。自分の馬鹿さに笑うしかなかった。7年たっていたのだ。そりゃ知らない番組も知らない歌手もいるわけだ。よく見れば近くの公園は子連れの家族でにぎわっていた。木曜日なわけがなかった。

やはりぼくは冷静なんかじゃない。冷静な奴はこんな単純なこと見落ときない。泣き出してしまいたい。涙を流せない

ことがとても悔しかった。

ぼくの生きがいはない。解散してしまった。間拔けに死んで……土に潜っている間に……。

結末が分かったと同時に急に体が傾いた。ふらふらと揺れる視界の中、地面が近づいてくる。これは絶望からか、それとも寿命か。おそらく両方だろう。あぁぼくにはもう何も残っていない。生まれ変わっても何も成し遂げられなかった。

そのとき、後ろでぼとりと音がした。振り向くと、ぼくよりひとまわりはでかいセミが横たわっていた。今にもこと切れそうである。そのセミからは、かすかに線香の匂いがした。

馬鹿がもう1匹増えたことを理解したぼくは、身をよじり翅を鳴らした。相手もこちらの正体に気づいたのか、翅を鳴らした。なぜだろう、こんなにもどうしようもない最期を2度も迎えたというのに、こいつを前にするとすべて笑い話になる気がした。

体はもう動かない。薄れゆく意識の中でぼくたちは笑いあった。

「……次のニュースです。ハワイで初めて、日本の固有種であるオニヤンマが2匹発見されました。オニヤンマは成虫になってからの生存期間が1〜2か月とされており、日本から海を渡ってきたと……」